能之所作秘事 二之巻

九曜文庫

# 花鳥餘情第三

並一　空蝉　一　空蝉　夕顔

並の儀ハ先横ニとりて云ハゝ竹河ハ濱
松中納言物語の如し但此物語ハかきより竪
竪並あるへきなりたとへハ一巻よりへ
き事をとなへと云へく両巻よりおこるかことし
又帚木乃中ニ有横竪とて相かはり末摘
花の巻ハ初ニ若紫同時の事をかきて末
ニハ紅葉賀より後の事をかけるゆへや空
蝉の巻ハ竪の並といへともつゝく巻と別

袖を連綿となすなり

これ帚木(ハキヽ)の巻のおもむきの詞にはゆ京

てらきりいまそ中川の宿にゐまり又

内よの事なれ

涙をさへおとして娘しれ

是ハ小君が事之則　次乃をハまハ小君が宅

蝉の売りしよいひる事をそり

やそつまあて扇を添かましかハちうつゝまし

空蝉(ウツセミ)の売れ源氏よなおひさるひかぬすハ

ありうるき事之二の一睦の詞あれハのそむた

かれらる紀伊也終(ツイ)にハ二條院の東院ゟう

けろひし事をうあかりしき事ぬへし

あし乃御をさ

いよのかみか女空蝉(ウツセミ)のまへこなり

ここあやれ一室(ヒトヘ)かきねおなりあにくわりんへへかさそて

女房の装束(シヤウソク)五月なりうりハひとへかさねと

こさうひとへ二をひ袖りうさねさうをのへこれ

時ハ河よひとへをきすこときとこえらうさき

の事之ここ紫より深かへし河染りハ

くれなゐ乃みこきとあかされなりり

とおほえ侍り

あるへくなりとておし

蜻蛉(カゲロウ)の巻にもおなし詞あり見合せゝす

見も色したるさまのしらぬ人と

みえたり河海に偏側(ヘンソク)とかきおかれたるか

右心と天をよみあはせつゝなし

おもの人をいと静(ニツア)かりのと思へく

この源氏の君のいまさは東のつましとよ

里わしき海にしみたまり母屋(モヤ)の柱(ハシラ)よ

りもめる人を空蝉の君との海ひとり

むかしへむきたるにゆかりのこりなくみえ

みしれることゝいへるはなるみまへて母屋の

柱(ハシラ)によりかゝりたるはおしなへ色も美なれ

いかしろきよりけるは色し西をむきて

のこるかしたもむかひさしとまくおくれ

人といふさえの御かさは折くりつる侍

まてとあつえりしみゆるはさしたるへきも美

あるゆへなるへし

そこはちりしそわつめ

ちは地(ヂ)也文字(チ)といふは是

いよ〳〵きくことおもしろくましらみれ

六花集(クハシウ)有古歌(コカ)とくいおもき判

いろはの枝ゝこの数(カス)は左八右は九中は十六

すゑゝ二十三ありといへり雑體(サウテイ)はなかに入

とよまするとうへり又素舞(ツミミ)の説(セツ)あるゆゑ

その後は又百首あれとそれ〳〵の説よ

相違(サウイ)を判して最(モ)長(タウミチウス)して人いよ〳〵わりを付有

時分ゝ面白き所を抱なし

かのまきれし人ふりは

わしの由らこの筆もちらみる所はまきれし

名やうの判

ゆきとちてあいさやう候さたへしきハ

わしの御ことの筆る判

あらりをいとくとおりしかり

何もしきハ人の心あさくなきとりて下し

例(レイ)あらぬ人待く

わしの由うことをいふ也

また君いるつにおもしまれ

後達(コタチ)の詞や

ところうつ風よういと

戸はなちつるとハおさなき小童(ワラハ)也

たゝみふしたるさまやとくあはれを

是までハ空蝉(ウツセミ)の君のひとりふしたると

思ひ給へるものをさりとハ三つの給ふ也

ある段しるし

あさましきハよめつ孫子をとりよかへつぬれ

なるへしなほ人をよめつ心の人をさす

俳とよめてあるは

小君の詞をあつきハくるしくをあなたなふ

こうろすり

少輔(セウ)のをとこなり

たいへの源氏君とおもふハ女そと同くこの

らひとりごとに少輔の御局(ツホネ)ふかくおもはれわ

こなたの倒例(トウレイ)りみなやまりたるもたるを

女房の御物あやまりハ源氏とこれの小

君か少将の君とさしよつまつくありくそ

と思ひしるやなるをとも御局(ツホネ)なとにとふらとし

たゝつまなとかひ給ひ候なりと小君の

少将のおもとのうけりひとしくなり

あらんとはかるとかへて

まこと夜乃かりのひかりにひとしく
源氏の君なり
おもとかことゝいふ人やまふてしまへる
老(ヨイ)人は源氏と廿浦乃君といくさしあちて
物語をつゝなり
いろへしきうくわかちく
おもとの返事をときこえてわかちてくさいは
色といそいつて来りなりせ
空蝉(ウツセミ)のことくけは我れに狩人のなつかしきは
蝉のもぬけするをおさとふとみやかんなりはせ

このうちかなへ
あの人はいかにおそろしんと
わしの我わさ此事して
動くりみまくり殺しけり
源氏君は此事をめ人よしみまつりあね祢君
も又かくしなき心小君か哀はよくはしり
おもつ酒へ

並二　夕顔(ユフガホ)

源氏十六歳の夏より十月までの事みえ
たりこれも竪(タツ)の並(ナラビ)也前に詞無巻
名(ナト)之

六條わたりの御しのひありきの比
六条の御息所(ミヤストコロ)の方にかよひ給しを則
かへのこと
源氏の御めのと星子(ミコ)の列なりは二人ある
つきに親(シン)王(ワウ)の列(レツ)なりは三人あるにて侍れ
初よりくつむ人あまくありけるなりし

かとの弁のかり太弐のめのとなり次大弐の乳母の
とこそあり末摘(スヱツム)の巻にしみえたり
あしとみ
下いかしきさる板(イタ)かきともひきたてゝ入りし
ところつりてうへあくるものよしなきとも
車(クルマ)よりもの隔(ヘダテ)とてありきの蔀わり
とあられし半蔀とも名付るや
そとられしかとうろう
侍よもとられ又やともられの影や
なをいきんなれはかくらのさうつきけるなるらん

源氏乃君は光ると今は世中にもてはやさるゝは
源氏といふ家の号とは同じからんとさて随(ミズイ)
此(こ)ゆかりに人をなくもとめし哉

この名の色

この巻は榊(サカキ)の名にちなみとかの日光(こハ)ならん
いへとある紫(ムラサキ)式部(シキブ)らんにも作りて山より
きこゆるはすと思ひまつりしや

むかしの世

棟(むね)くしかりし物乃棟梁(トウリヤウ)なりけるぞ
たちまち世のなかにありし

毎き物よこしまなるんで地上や天下の有り
うつりかはると世をふるくと有

いむひとつのことしに
尼となりし身にて斎戒をとりし
仏のて作りてみな白露のひかりをてらし影の華
身のかはり世の中のまよひも人にてかかり露
乃光は源氏りしまへにそへし万々よりつ
みなを春人のたよふ御事とのを作りしに
いわ爾(サウスウ)をとうらめし身のありのいふしき
かるみ林の花なれは世を越ゆるなと

なくやより我と爺人と自称しへきたり
あつさるゆへ　毛頴は歯如瓠犀と云り
爺人の歯といさこのさゝりまへる事
もあれとされしそこてのかりしはいはれぬ事な
なへし
やうかいのとけなる歌人の家ありなん
奥入云この事は東坡か外史云知人か
なくの世なる説あれは徒国の人ことに九条殿は
月輪入道関白の東くはなよのさるる事
みなあやまれり別よきさとさるへし

これゆかり紙よりわかれもちにけるらへく
たらうどより歌ゝ事後撰十九巻のこと
さうりあれ
汝ゆゑしれ不有りは
六条御息所の事て
昨日夕月のつこりなく
夕顔の宿はみなきしきの家にしけるか
あらて
うらこなくまち字しらなれ
親なの兼の事しや

ゆきくれてつゝ川といふはしらす

中川の宿にて暮らし給ひし事を思出し

給へるもまたゆきやらはく侍るのみなれは

問ひてあるは給へり

ひまのきれつきなかりしそ

其夜の物語の時の事をそへくしけまん

とも給へとなり空蝉の君は斎はにけ

わすれなる人とかなりしはかのやうにぬるゝ

くりかへしおりいかし給ひにはつきなきんの

新しきをつゝゆかしきやうなり

まつことはゆかしくなるとも

軒はの荻の事に

引き返し給ひしへなりんはゆくとしるへし

六条わたりのけはひうかりしとき夜ふかくは

ひまなくなり給て引返し音信せさりしは

いとをかしうてしるし

かりそめなりし御心まよひのやうなり

是は荻の女御との中ぬすみあひなり

御心まよひいなきものとも六条わたりの事

をかしいともたへ給へて

よそひのかたくなにけるく

此息所ともしとやすき人ハ源氏の君なり

似気なきとなり

嗟嘆ようの所てふれいつゝみたまひてさうきしき御の物語

あさかいハ中納言の君よもしつゝそハわさ

かハりし女をたえてしまうこと

毛詩云有女同車顔如舜華とあり

おもしける所をさかいハ乃もさこまかし

くとゆかさぬかさしぬきれすも露けき

其の中にもまいりて

さうしハ童ハ童女といひ又ハ人さき給のあ

こゝろさしきりハまことをたゝへしをれうへ

所かさしぬきとこうちおしきりて女

ちなむ色し

これらはあつりめかいまみ

これ光がとなりのかいまみのみし給ひしつ

あさらの人をおりとりとゝ家を

中納言そこれもなきおり給ひさ

此中将といふて

おかしまよそうし給ふ

まことに命のきえくれとありけかし
それのつきこの紙にて
をしよりおちめ入のれいんさうしゝ志て扇と
はさりて
君ハ御なみしをさとめく
これをあつらうかへるも
こと給りうへハ
中将のうしろのつはと小舎人童
とりて夕顔乃宿のあるへき中将の
いとものあはれとしつてうるへ入りけるとあつ

かりうハにて世にしなかり
それのあはれともにもさまはいとし人りやと
西殿の枕をかりけれ中将のかうりし床
夜なやと過路え
まくまりとりと志てもくあはとふうれおもに
その後を
まつとりハ秘しえつきおもとへ夕顔のと
あけそと女房とものうかれあやしよ
人りあつきくあかいふえそれとおもふお
いらく志りくれとまさとあつねかしたそう

おほ迷しあくさはく由りあ利くれ
これなるの源氏君ならぬやうにし
くらしかれをまいのあはし川
夕かほの宿へ光君みちしるへておはしまし
車はくらしかれは惟光よりひかりしとそや
家の人
そのこゑもおつしやう利なり
いとあはれきこえてけされねと
夕かほの前よりもてなしあはれたりつま
のあさてもあらましうらみし思ひて

ちりなむなかにせんつるてありけれ
ましあるもんをものへんけちにて
二の手縁河海のものを作り大物主大己貴
二神夫婦三輪大明神の御事也
大神はいかなる図像のあらはれ給ふ
諸元神のいさなみの道あらはれたる事よ
まよふらんへし
たゆふをとるらむかふ
大ゆふにこれをつゝや
利のぬれゆそあし

よろつの始終わりなしきにて
いつれもこゝろねあはれなるへし
あるひはいそかされ終への御にて
或いはきゝのかやなと
或いは今月の名をとゝめんとてか也
定家卿なとの小鍛冶をこそ終ふやうありを
家のとなりわたる事ありおひてもすゝとや
何ともうたかはしく作
上ありさまはかのやうすはとしてはつまおもし
人のおもひのまゝのをしと

詩十月篇云八月在宇九月在戸十月
蟋蟀入我牀下とありまことにやさしき
ひとへの御こゝろさしありてこそおもひとわ
れは家牀下に入ていつよりなれり
しろきあかきをいはゝ色のなかのなかる
しろきあかきをのきみえしあのうつさき
なるへし
ときにふ月はゆくりなくおもひわびん事を
いさよふつきにひときりやとりぬんとす十
六日の月はいさよふ月ともいふ

によりて庭ともいふにやそは十五夜
のあけしこの月をたれも今宵の月の志
きしやもていていふ物ならんへきや
わたくしとてしりそいて
り秋乃袖寒きと覆面(フクメン)によるや又扇(アフギ)
かとのしかさして月面によらされるらん
まやおもひなし
夕霧に袖をしく花は露の雨かなと見しえまでなれ
きとくいつしかわとあらしかかん
なりえん縁(エン)て

あしのこなれて
宿をかへすといふんなり
つまされありさくみ川いさらに路
あまた子と女のいふりつまでもすもの
宮をそりて世を我身の今をあつ称ん
ものり行なれもしくりありとしみち
つゐえりて桜となれり
あまり心ふらし今朝しきのりて行し
是は六条の御息所(ミヤスドコロ)の事にて源氏宮のころして
へすつるそしよりて邪気(ジヤケ)よるなるみや

わせたるなり

きこゆる物の音にはやかにきこゆるをいふなるへし
或説にいはく此段は滝口の事なり今は
亥一剋に内豎時のふたを奏して後侍
臣の名をいふ事ありこれを名謁なと
いふ殿上より内とのゐ申侍臣たちのかたより
と同事なりかやうの事ことに滝口の宿直
のゐ申ありとのゐ申といふを名謁と
同しく滝口は其人のなをいふまても弦の
剋の事なれはとてしもとけありしこ

うとかなり

侮しう

侮しくかなしきといふ物のおとなりあるか
侮しくなりなんなり

物のあしおと聞しくせし
延喜八年清涼殿霹靂之後貞崇法師候清涼殿之時聞大人足音是非神祇爲世云々見李部王記

いきとのへ殊くそ恐しき事をおもひ知る
あまりありおそれなる事ありは申なるし

ほとゝきすなきちかきとふとりしもの時に涙
をいふかなしきや　杜子美詩に驚定初拭涙
とよめるは此心にて
志のひねする人に
　志のひねになけるゆゑ
神まつるとおもふらく
　卯月のよる世待の事は八月十六日比こ
　となりの月は斎月にて一日より御神
　事あり十ケ日比織しふれ禊ふよりり
　て先達のおもしき事也

ひゝいふく
　霊礼やみをりの事なりきこゆる事をいふ
　京さいろ申すおもちいりぬべくならむ
　右近の君かなしさのあまりに若にあふとな
　けくらせあんとよる事也
ほうの花といふわかしかはれはなし
　杜子美も死別已呑聲生別常惻々と
　詩に作まりけり生死ともに別はなし悲しひ
けふのたき
　賀茂川の堤の防鴨河使といふつかさあとを

くも賀茂河の隈とけりんなかそこ
ふりくる雨くらし
ふりまとふくもくろきこん清少納言か枕草
子とおなしき抄なるへしくらくは
河海しみえたり
あしとそふく
空とあゆむいつらしてと下の句よあわす
なり御法の巻にも空をあゆむといふ言
あり
おもひつのといふしくまいかへし歌とく
けいさいとおもふ説くといふ事そ説あり
古の詞は歌よおもしろくなるよ叶なりと上けるを
見えたり
こそあとおもしろくひしれたるよいつらつらはさうさるぬ
空蝉の君の言思ひよるのは源氏の病
悩とおりひよ聞てよのあり何語あはまう
ひのふゆへとなしいかさつや
ますくは四ゆたりなん
いけるかいらひとつふるへ
なけるかひあるやなかつもりしてふる

いけるひかりしと源氏の君の御うへよりそいて
ふ未来なれとの給ひて
空蝉(ウツセミ)の世はうきものとしりはてぬるのちは
うれしき世の世をしのふ世もいとはで
いやしからぬ人もありはてぬる人の
うき命をうけさるものなれ
孫の君をみけるとはいひ給へは
源氏の親よりかくの世の中のありさまを
ときしれ給ふなり人もぬけは蛻(モヌケ)の
家をぬけ出たるへからしとて心をそらり

かくてつらきいは
新(ニキ)なる筆(ヨキ)の事なれ
まよひたまはまり給へりや
ものうきよまよひは人のいまもちたるをまたにうつ
いふ物し源氏の君のうへうひ給しおわりふ
しなれはくさりありてのちゆく
永の今年九日
十月四日(ヨカイツカ)のち年九日(ナヽナヌカ)よりはしまりて
とんちうちかきて新文(カヽモモ)作りて世給
皇明(ミナアキラノミコ)親王室家藤原(フヂハラウヂ)氏筆九日新文(カヽモモ)後江(ノチノエ)

相公朝綱書之見文粋
生者必滅釈尊未免栴檀之煙
楽尽哀来天人猶逢五衰之日
此願文之内や
あらしをふせく木の下かけも消ぬ世よりもきてみるへき
来生の罪云をもとしるへかり
こうちきは夜のあけかたれはまさに我身へのも猿
のあはれをもそあはれけり
きめけの衣は夜のこうちきに旅の装束
は冬の衣となりぬとてつかし夜

なりや
さすかにまよふ海をも二道ともに志つめ梅の花あり
これはゆふ影の上にさしかけけるは
空蟬のくもりなきを命あらす
あはれは人しれぬ事はかくかりとら
けるや
やものくさし来事は
此一服は抱語の作云の趣ひつのはなつり
ともようき事はなるかきるはあきる事
かくあらへ飛をも一回よりときりせはのへし

あるやうなれとありつまうにおもしろきさく
内にありなりしハ事おほかるとも前りをも
るしく書るこ一ひあれとも是ハ其中を
抄抄裏して省略(セイリヤク)してうつしとるといふさ
みかつくりとや

花鳥餘情第四

三　若紫　　若紫(ワカムラサキ)　末摘花(スヱツムハナ)

源氏君也

手につみていつしかもみん紫の根にかよひける野への草
此哥をとりて巻の名とせり若紫とはしまさ
哥詞はみえしと式部卿(シキブキヤウ)の姫君(ヒメキミ)紫の上となん
付侍るハ藤壷(フヂツホ)の女御のゆかりの尋(タツ子)ぬるよ
よまれるしハこの巻の詞よ秋の夕ハまし
てなのはなくなりみてるゝ人の心あ
くかりし人をみつけてあかしからゆかりも

むつ祢まかりきんとまいり給ふ事しあり
源氏十七歳の三月より冬まての事なと
にあり

わらは病

瘧瘵之寒熱あり毎日おこるとは日おこり
とふ日まぜをは隔日瘧といふ

御まもりかと

まもりとは厭術之ためしの事とあり
杜子美か手提髑髏血模糊と誦し
ても瘧はおちけるとなり加持は真言教

の陀羅尼の力也
然しより後はおこりもやみ給ふのと
りもきつくぬ

円融院瘧病とてさる世給ふ時天台座
主良源僧正とめされし事は天元四年
の秋の事也小野宮右府記にみえたり
時人以良源僧正称應化佛此時被聽輦
車弁執杖阿闍梨二人其後更被任大
僧正云々

山のはにいまてさうかりて

はるの世をくらまの花も都の風ちりて
てらのちさとりやといへり
書写山なにはしのうけ
あかしのうけハ揺してハ味をさくるむへ
うらを別してもあさまのあけをいふへき
みやうしあさきと對していふゆへ
ちかき所ハしかりまのあかしの浦とて
是よりハ殿人大夫良清か物語せし良
清ハ播磨守か子なりしかハその國の名所
をよくしれるなり

さてちかのひとつの
御堂関白出家して後ハ入道殿と申しき
是よりハ出家の人を入道といふ事也とて
むかしてハ多田満仲をハ多田の新發意と
申しけるなり
代々此國のはかさ
播磨國司を以て國司ハ一任四ヶ年とて
西国よりかはりてハ五年ちかよりあかりかれ
事なりしを任をのかさといへり
かいつもりのきさた

むかし大香といふ王ましましける女を
かうりけるを胡国の王四人ともにこれを
きそひ事をのみしけれはしかし女娥を
うちみて父の母ましまし悲しかりけるに
のちにありて廿七万八千九百里を
とほく龍城ありけるの龍王ひとつの
て大海の底にすむ事をゆめのこと父の王に
あつかひける胡国の四人の王とも是をしりけれ
ひとくくりてしる事ありけり吉祥天女
の沙羯羅よりかへりて又娑羯羅龍王の八

歳の女の母も王の妻なりしにききたるといふ
むかし相遠にて侍り
人々そこしかりけるなりけり
正月の白日の叙位に六位の藏人は叙せす
進爵とて位の位下に叙せらるる事して
かくありとみ爵のすて
いくやさいふともかれかいふ人
又一人のいふ祝藏人は是かいふをとゆめて源
氏のゆかりの人ならしかしの人な
の事といふなり

うこのみなうたねむつしく
あまのをむらのみつうちて夏はおりてうつりあるとそつむ
山ふきなとハ
裏山吹の表ハ面黄裏紅、花山吹ハ面薄
朽葉裏黄之
かんさしもさいはらしくそ
おさなきはいまさらんさしといひねともとと
おりしなりてこそあけたまいろしうる
色さしといふふんなり
わかきりなくんつらしきこゆる人なり

藤壺女御の事　紫上ハ女院の出いよおる
きもいとらおもしろつもとをりて
初音の御ひゆくまたこうあまにいそう霧のきこえんとすれん
初音の巻そうつきこえの葉そうすあとそひそらに
こやうきうなとの
御よたまり香をと名香といふ牛頭栴檀な
とふあの香をといふ色し
ましたけなれりなとよの御様の人なりしな
たうへく
この姫君のさ十六歳の事なれはそわく

ぬやうは世のつねのことせれはなかしいとおして
碁対(ごタイ)やしるしつけんともん出今はうのなりけり
いひおつ来かとゆしよわりんとききとく
みくのゆふ有り

おのつから草をいそらぬく語へつん

源氏の君れしんえ乃かいはみし給ふ
時祖母(うば)のあま君乃おひさしむおもとを志
らあらうかまと口をさと仰しやと源氏の君の
ゆる給く御若葉の若菜(ワカバ)の来(ウヘイ)の成こうりと
の語をあま君はうれしと思ひ給ふていはく

きつ語つんとありしくらひもつきまく
とにとくりし

苔(こうう)ゆふしと秋ちる風露けき浅深山の苔(コケ)よくてへり給ふ
高光集
奥山の苔(コケ)の衣よくてへつん川色か衣にかれとなと
尼君(アニ)の御業の若葉のくれとてのおやし
らひけりとよみまかれいかて旅の乃御を
露うかぬりうの之苔(コケ)をやしらつや
ひらくるみれとと御しかふ

太山(ミヤマ)の苔(コケ)はいはもと露けきなれはひらくるも
とにかりこの初かしありひらあへつれなささ

めくりあひし
やみに今ゆくみちはせしとはまよひしらず
きかん

是までハわかし君ハ思ふ源氏の君なりしハ
母ハかんし給ひし御世のかはりして人の
よし常行てハ源氏の君れいまの比とぞ
あるものなり

佛ハさとりのつくしたまふ

上なりけれは内にあるへからすまりてくも
内よりみまかしかは内ものゝとの給ふこ

こなた又佛ものゝはしめとしもつしのあさ
しのわさそらなぬ事ハ佛を自在(じざ)よ
まゝせ給つ余となり
おもしろきものしまふとゆくひりなせさ
まくて

おもひはしたは宗とも母かとれなり源
氏の我も孝義(カウイ)にしたかひつへからひよ
かきまくての給ふて
法花(ホツケ)三昧(マイ)ところの堂(タウ)の中のこゝゑ
止観(シクハン)ニ四種(シユ)三昧(マイ)あり所謂(イハユル)常行(ジヤウギヤウ)常座(ジヤウザ)

半行半坐非行非坐乃四種之法花懺法ハ
半行半坐乃三昧也懺法ハ天台大師或
説遵式作給ひく六時よ六根の罪を
懺悔する法問也
さしくミに袖ぬらしける山水よすめる心ハさわくやハする
みゝなれ侍りにけりやと申給ふ
源氏乃涙もよほす滝の音とよミ給へるよ
つゝくさしくミよ袖ぬらしける山水と僧
都の返哥しよと侍るをさてかんハさつさやハ
と由ハ僧都の我身の事くくをみ心
まし侍るといつともみゝなれ侍る滝の音なれハ
住山の身ハ心もさはかぬとよめるとの文案よ
二首あり源氏の君の御哥なるへし
とあるハさまあれやいとかう僧都のすと
よそあつまりて下の詞となれ侍り
名利やと思ひ給へり
名もしらぬ木草
白氏草堂記云　雑木異草蓋覆其上緑
陰蒙々朱実離々不識其名四時一色
いろ〳〵のちりまかひ侍れハ

僧都禁足の事付

聖徳太子のくてうりえ給ひけるこんかうす
のちにかの玉のさうしうくして
百済国より金剛子のまいらする事くえ
興福寺資財帳九云喜多迦子合剛子此篇
百済国所献之云々とあれし聖徳太子在枚
珠の様は未見出しゆゑをかりかへく
よりきこえぬる事をいはんより事にいひ給す
きし事也

昔くれあめのよ花の文はえてと頼は家の立うまりぬ

法まり草をはなさとてくをき給へる道あまね
君の政事にくるをしれる家は源氏の物語をそ見つ
らんとをき給ひしとかるをしられよとそりあり
りていふ事をはかすちいふといふし
あられなるおりからまりゆくへもしれすおはり給ま
あるひのりこれひとかのせりすまれ給ひてん
上の傍郎の事よ光源氏と優曇華よ
たまたま輪王の出世よりよせさらめやよ付紙
あ白之
いそつのひとまりりおもて給ふらん

是ハ文宮りいに給ふく故董氏女御なりしか
おしのふたとおやしくひめふて友なりし一つき
阿い脇あれそり御りによそあつを一把よみて
のふりやとのすふすれ
おふあるそをしつを給へるさまあと
河海よ給ふをふきをたくえのことにいひあれ
かへるあしつをぬをい宇治のまきれりと
みをりぬくふをまていあるましきにや
嫁娶記よみえ給り艶書のつくやうそ
假令紫或お蘭植二重りうとうきてと

もろこそて月むらひて墨を引あらしれと文
蘭植一重まく崇めしい折金あとのとく
給ふそて同蘭植をおそくころをくひのりも
類をいふこ是よ墨を引穴ハ両筋也

はるかつき

うつれの物綴あり給の大符まつ文の御
れうりに都くまつせらるゝあやりもてる也
ちうきといふ事あれ
わさら山荷こを会を思ふよなと山の井のはけるあはれん
給さよなにきりをたつきをまあんとそろり

よりくあさか山をこえし給り古今の序
の詞にとしよめるあさか山とけるなかんは影さへみ
ゆるの山井とあさひなかるこゝろをもさしは
さる事をけるなるといへるなり
くみそめてくやしと聞し山の井のあさきなからや影をみるへき

是は
くみそめ汲そめて浅き代は神のとめける山の井の水
のことよりてくやしくそくみしといへるなり
人はあさくくみしよりちかくよりては深くと
くやむ事もあるを見しらてけとみえたり

かくやまかんよりつきといふこゝろへ
これもおなしこゝろきにや
こまさりくりさりて兄上の御こゝろなほし
此事とやさき世に猶ふうしとやかせや
難波津の哥これはちゝはゝ難波ふ事ありけく
三ほ四ほの哥の事なるへし
是はあさましき事をおもしろなさり
是より又源氏君は女御へまゐりちかつき
給ふる事此詞にみへたり
あくるよし給しきこゆるにちかましつゝ給

もさうとなん

源氏の物語蛍の女御とみえてちとな
とさりなる所も御とりくるしかるを
ありか世よりされ給へ人のかとのとつ
さむのふとよしせさて乃華よさかえよ
給ふきこえ古代さりなるんさわまさあよ
あは袖と
をくらの山ありやとりもとしまりく杉わし行
てあやかく所恋ふしの夜かく
六帖三
をくら山をしとおもはゝたく仏をいとかとつてくるを こしらん

今案 此うたハくらまにをくら山をとゝ
らきかことよりもあかれいこて乃詞よきこし
きぬかりあかやんハ夜かもやくわくれしえ
ものかくもかへ所にり御かりハこてまわし
こさし之京極中納言の詞をとりてあ
哥有
このひとまくら鳥山よ宿ゆ晩志てめ家やさあと
御のあるくて有氏山依るみつてうらの者氏家の桜や
世くらりに人やはへんわさら給のくさき成さあ家なひても
源氏の多代かかりやうくまの依御とよみ

絵かきもわか身と筆とりあさきやといふんやう
きみをはかれ長くも日本くさめ筆とは
ぬはめかゝうちの筆とりはわたしとあるか世なる
いふへし世ゝよりよ人やつくへんて哀め
の有様のあらしもてなさきまし
やそあさき様よ御心もし給ふ

あさき様は様とあしやとゝか返しても一ゝ御方上東
門院の御方も大略同し人そ
三月ばかりよりかれしまゝみてそまつりく
みつきとよるか月とうけてわとあり藤壺女

御はらみもあらくなり給ひて三月ばかりおなし
かくて此三四月の比のはしめつかたしくも御墨
にまし〳〵るか村源氏乃君ちかつきより給
しもり御懐妊おはしまして卯月の比より月
いと河さりあけなく方のわたりみかほと
けれとも心はちかくなくあくる程に
し九二月十余日に冷泉院はむまれさせ給ふ
十一十月よりあくれてや

御めのとは弁命婦
諸卿にも御遠わり一所云御しかのくる弁

命婦とハ王命婦ハむかしのえらき人の子を
弁命婦といふハ歌仙なかりしハ弁と
命婦とのみるよ旬とかりて二人の名と付
弱もはなのとやうれしと王命婦と此二人也
又かのこれ弁命婦と旬とききハ弁致
婦ハ一人の名也

源氏乃君をおそろしくさゆてられるハ夢を
見給ひく
母人て源氏の水のここ此侍るゆ
き弥く御位してつかせすへきにかれ

此夢よハいとあやしくおそれしもつ宇
ぬといへり
此わかうりしとうしたりひちわれと
是ハ源氏の御子をと人の御子よりひさ
きうちしめやかのさえ河海よ左近の事
とふかハいつとおほしけり左近ハ朧月
夜の事なりしけり藤壺の御事ゆへなれ
あつきうゆへ
此乃夢あやまて人のうらみにて給也
夢ハはかなくて此夢あり思夢とつたえ

さ稀の夢といひしハ年の内にゆるや
毎夢といふハもろ〳〵やうなき事なとみる夢
想夢　正夢といふハまさしき夢　殷高宗
傅説をゆめに得給ひし類　吉兆の夢といふ
ハ善悪ともにつゝしミてきこえし丸夢ハ丁固か
松を夢みしハ六十八歳にして三公となり
江淹か五色筆をかへしてハ文藻日ゝおとり
あるもありしとこそ源氏の君にハ
夢いつみ給ひしとなり
御ありさまよろしき様なれハ

世もやう〳〵涼しくなる時分なとに
かの山さと人へもわかりてこそ給はりけれ
紫上のうへ君ちかう〳〵ひしからくありて
京六条のさとなりしかの御事に
ありしにはまさる御契とこそ
後撰集
忘るゝ事もなき世にいかにおもひかれ
と云事　夜つゆの事にて
月のおもしき秋志のひとゝ哥よみしハ
ありし〳〵ものかたり
此君のひとゝ云ハこれも志ハ六条京極

のあたりなる御へし六条御息所の事とい
ふにやあるへし
いたはれなりけるのさうらふやうにて
是は紫の上のかくきこえ給ふとや
又わとつくくよりけれ給へとまいは
上よりも給ひしかりてとうきてと見へる
は老病にて采発ありや
いまけふ也乃一郎のうらあまにありつむ郡その内の
源氏の内にも思ひと源氏の君一日に見へなかやう
りわしかとも今わかきとぬとはちの乃とと

かくて思ふかつ給へるかに一郎とか
よきて給りて給へるやうの事せさせつ給
ありあ御事なりけり
姉の女御ましてて
藤壺の御事也へし
きこえんへるかたちをもわらし
尼君の弁せ
十月に朱雀院の行幸あるへし
朱雀院は　後院にて　天子脱屣の後御在
所也　三条朱雀より四町にわたれり

延喜乃御宇よりハ宇多御門と朱雀院
とや申けり十月の行幸ハ紅葉乃賀の
事なりし
きちめかう月のかけのわたりなんけり井戸
ひかしう

あし君九月中旬のほとそてハ六條京極
乃家よりうしろしらぬはるかなりき廿日より小山
より東路より先帰りて
あまた物し給ふかうなみのあるつりきこや
若宮の宮乃御むかしを今の小宮の腹よ女

一人冷泉院の女御ゝ又一人ハけうちの大
ゐの家ゝ其外ハ系圖よのとは
あさかの浦よりあかうてたつこハ立たりつゝ浪かえ
わかのうらきゝふかせく若浦をわけき
かのうとしへるやらしかまかつる君よゐとうて色
てそり對面あるとをようてハいつうへるへ
来らぬすり
めさましかりんとれ給へて
人つくるてきこし給いとくちさましうて
むとハ面目をあるまじうんめ

よろ須ハ心をとめて和哥の道にあそひける人轉てうさう
かの細ミちのよみおきたる議(ミコト)ハはらんをとめて
なにか弁経んハらそんらをうとえおり
なにをいへさいはけなきれの事
されハよもなき御しおやうにてあはと
やはらかなり

この年九月をもちしてやむ比
十一月の八日はわうし宮乃中陰(チウイン)なりしに
けふなりや朱雀院(ミユミヤウし)の行幸なともとらる
ゐもし

世のそしきこゆるなみもよそもくりなくひあへ
利そ

紫部の御事父ハくいもしも姉と
ときしくなくひかりなり
ほしのひくかなひもうつりのみちなれハ
上かけのおうしき秋ものひとつあにによ
ひ綿ふとあり此の人むすめなる夕顔(ユフガホ)
乃春のそしき宗衆よりのひものひあかも
求とあれハもものひくうつひもうつ前といふ
あひるなひく宗もつくり系図(ケイヅ)なりけりハ

別（べち）命以外

たちまちに霧風のさそひくる花の色はさかりとこそせし
かれとこそきこゆるかたちにて御ことなる草も
とまりたれ人さきへ命のあるもあはれものぞと
いふもなき別
おしみてもはかな命のかぎり急ぐ
きく君の事と
六宿
よるもあさも見はてぬつまこそ神無月急ぎ別れぬ
あふこそうれしく人恋心をとどめし別
此人は無き心の文の道のまことのこころなきへ

ゑのきかひなしとかひなき心かくしとも
お納てめのとのとも思ふうち君のなかり
移くいかとも見なき残りる末おもひとは
いふかの別
たのみもいかなる事にかとんえ思ふ
めのとしあさかりいのちを夜桃りさはす
き事を思ひてゆり佇るおもひいはしきを
これらかんえうてあゆしくちりひゆゑ
ありしに成す入きて
和琴（わごん）に菅掻（すががき）片掻（かたかき）とて神楽（かぐら）催馬（さいばう）楽す

ちら井の事ありぬ拍子にハそろへきミつと
拍子なりハそろへといへり又筝なとも無楽
曲終りなりとも菅撹といふとこそ
屏風とてもあらはしたくもまたゐひ
かへすがへすハ南乃字を榊の名にもかや
ともあかりくにとりうちあり刈とあれ
あくるふきのあきそらいつへ
御まへなとたかひのひろくハりかくあれハ
むしろまでねおもあけをひきのぞけり
乃事や

女ハ心やハらかなるをよしとせき
源英明男女婚姻賦云　至剛者男至柔
者女云々　在文粋
あかりくらさいそみゆりいろいろのことやかなるは
からうへいふともとさて
あかりくらさいとみはの羽ハ上へいけきてくる
詞をあそびおもとき婚礼のかたちとみえ侍へ
かひ色ハ外祖母の服ハ三ヶ月乃中
なれともかひなきいひとしときのかたにも
やみ火色と服忌のこる事もこれ例か

きよらにこそみえてつやひ色たるなり

て候なり

袮とハ根とも寝ともいふ　むかし男のいもうとのいとおかしけなるを

袮とハ草の根とかけてよめるや

業平(ナリヒラ)中将妹(イモト)をおもひてよめる哥

うらわかミ袮よけにミゆる若草を人のむすハんことをしそ思ふ

此袮よけとハ根(ね)を寝(ミ)によそへてよめるや

かゝるつきゆへとある袮ハなかりけれとゆかりゆかん

（家集）こゝにつきゆへをあはれとはむすひのまうへ

こよなききぬむすひのまとひなりけり

蒹壺(ツボ)乃御事とゆかりなるつほねにて

おもさる袮なり

さりしうらみきあふくれともつゝきありけり

そよりハむかし君のゆかりなる人なりける源

氏の君とあらひこきのゆかり袮をも

いふなり

並

末摘花（スヱツム）

此巻ハ若紫（ワカムラサキ）乃横（ヨコ）竪（タツ）の並之源氏君（キミ）十七歳の春より十八歳乃春の始まての事あり

哥并詞ともに巻の名となれり

なつかしき色ともなしに何にこの末摘花を袖にふれけん

詞に 猶〃の末つむ花はかひやうなりけるは

てありとうかり紅の色は末よりさけしやう

常陸（ヒタチノミヤ）よりつむりて末つむ花とはいひき

陸宮の姫君の鼻（ハナ）のあかきにたとへ

つくれるなり

思ひともなき我名をさかしく夕かほの露かゝりなる

袖かな

夕かほの巻につけて發端（ホツタン）のことをのへ

又若紫（ワカムラサキ）の巻は三月に北山へまうではやみ

ましけりより物語のうちはしめてかきけり

此巻を若紫乃春よりさきの事といへる

ゆへに夕かほの巻につゝきてかけるとし

信明集に

時雨つ栴との心ろをも露もなく袖の花し

御いとましさ

司馬（シバ）相如（シヤウジヨ）琴（キン）を心として卓文君（タクブンクン）を挑（イドム）みて

桃は女のかしきことゝなるへけれどもし
さいはうにかゝりゐてへだてのやうのもの
殺をいとひそのこゝろなり
まとしき事
ようかつ孫なりし也
萩の葉もうつろふ秋風のふくよりに
夕がれ為て老人かねかよろこびみゆるなり
侍従中将 秋風の吹よりまさるとかや萩の下葉はまつふし
かけられたりしを
よしひのけたり碁うちとみ侍りしと萩さん

わかよはひにへけるや
故常陸のみこ
先孝天皇承和五年正月任常陸太守
其後貞純親王　代明親王　元長親王任
侍りし
命婦はまゝ母のもとにはべりて
兵部大輔の花山の院のおほむ人の
の妻は前の女なりけるを母も
うらみけることも
晴むきてはかなくとていひけり

ものゝあはれしる人とそいはるなれ
伯牙弾琴鍾子期知音なりけんも
ひときは行ふ人しもとの様く
百敷よりふ人をもおほえたれとも命婦なり
かさけたる人なさとく一あそあしきり
給ふ人なれはみきりよいてるりしかれと
ものこゝろすれ
やとのありしそ前栽緒りしとあはれなる事
ともありかれし
うつほのとしかけか女 中忠のすゝや段女
なかたゝ母

十五の年母にはなれ女一人のこわくわきま
いやしみなからわかくたゝ寝殿にすみ
つまなりけれはあはれのやうになりける
その時の太政大臣の子ありて賀茂にまうで
給ふに此家のまへをとほり給ひしかは
ひくしかつかくて君きこしをきけり
家のありさまみれはさまにしみすまひける女
のみえてこゝろこゝろのはりけり女
ちかよりてかはしけるよ人ありけるとなん思ひよ
人かそけるをきゝいそしうかなしと

これはむかしさくら賀茂よりまゐりて宮ゐしてあそ
ひかりそへてまつり給ふよりて宮ゐしける也
給ふ人の皆かくりゆくそれは此家なりしに
と申す御まへにも給ひの雨あまたかそへてを
なりぬるものありし人のこころにくく給を
ろひし雨あまたれは大雨あかりけるをさらにく
らの中より給ふる人かなへしよまうせ
てあひつくる尊の末のかしききかくれそき
ときれしぬるみかきやとあつはんそ
くむしの声ことにくきこゆるねう

けふまてむかしよりたえせぬまて利
尊をとこに光をやとまるれとかとしふそ
と語りけり心あそけるみ給をかもかしん人
にひ居られく
むかしはもろこしに蕭芽主に抽給ふ人の昔
家よりもおほ御事とさためりそてくうち
けうてぬ人ききいてことによりあれと
けよ給もお御事とも命婦か常陸（ひたち）乃姫
宮の御事をうけりやと源氏の君宗
存りもあゆとくんし給はぬらとけか

うるはしきはことにさらに父みかどの御女なりけり
ちぎりける仲へ今こそ今はあはれ稀とおもひし
なりさりしき白あらさまよひたまひけり
宰相君のきしと宮のうちに命婦をとゞめ
ひ給へ
此人のつらきやうなりかおはしますれば
命婦は御ちのとみなれば今のうちの
いとあはれすこしのまいりしかなかりく
なり奉りてなゝき之上は内へたまひてをおり
御いく給ふとありしれはなりけれをとる

おほうちやまは帝なれをも内より退出の時
くものうへもたちかへりたまふ紫宸殿をも
承香殿をも清涼殿中弘徽殿あり
時布衣をとゝむる例もあるなりや
云ふ故に大内山とは申すとなむいふつきよせいの月
帝王系図注云宇多院山陵在大内山仁和
寺西北故寛平法皇と申し後世
所伴かくしてみちのくふかいの景の松風
もこそ吹きもり来ゐは大内山にあつかひ
忠景のおもふるへし　文永
奉之

小山陵役を被りて時彼山陵遂に垂亡人とて
李部王記 天暦二年正月十日大内山火起
不載 又康平三年四月六日天子放若
棲回不獲之雉於大内山とて
大内山は仁和寺の名所なれどもここにて内
裏の山なり用ゐり 日本紀に内裏となれて
おほやけとよみ 源頼政も大内守護の武
士として三位をのぞみしかは大内山の山もりは
とよみけりさよひの月はやどるかたのへ
相遠あし地よりもさよひの月ありしき
ほとりとありて十六日の月をみるはやすらひかつ
なし
星ならぬ影とこそおもはゆかしさの山を詠めらむ
星ならぬ月の光をいふとも晴れしこの
の山まてをもあかれ今もあかれりけりしを
よる事しかしむかふとこそなり
あくまでひありしはいつも志ありなん
是よりは中ねの詞も随身は近衛つき
の身なりしをさしてつくりておかり
のみてしこそえらみ孫語あを

むかしの君乃事之

このちこあこゝあこさりふたおて庭り給へし
をゑつむのうへ源氏君も故中将と文を
給りされとゝかまも逢事なきいり給
うのことり不堪るかゆへなかへし
あつくの逢すいみあやんみすりゝすなる利
しかり

これハ中ねの親之すおかとんぷんをお氏め
しらかへ
されハよひよりに入利と

これハきんへしれんことや
今きしるまとおりつよいて給へし
中ねの心之源氏のいさう人と逢事ハとれ
給をとるや逢事とみ給をそうおけての給
とんえく中ねさうくハ人よりてもすも
ありきりと給うておへうし
ことと葉おおつれんへしうさまて
きんもるい錬磨（とこ / まりミガク）とふんてちらせとお
へく
人のん氏のよやゝなかうしのうへて修りとおも

ことはゝにならん
人の心と女の心とはかはりにかはるくれ
とのおやもちたりなる事のあはれさそ
大かたのとりとのかなて
屋かりまさることいとさしなれなり
命婦（ミヤウ）は羽そてをいらう〱しきうく
いますき人なくしとんえかふせこめしき
もおさなきましきんて
人さしぬ内地かりひ年
萩つれ乃事なり
のきみこれなとも
又たしかふうりてゆふの宿乃事をいや
て後えさしいそ給ゐ
又のゝ事のなき事く
るみやゝとうきゆうとちらかはあて
なやゝやいなふかといふ頭とぬきてうとく
なれくしさんてとみきたりそちらかあ
て時とあまてうちのとり面さしひさをとく
おやくろう中かくこうあけちみつゝ北経
くせのつきのふり

命婦の内事を心よ忍ふてこそ一家ゆへ
治る事をもしるし行るゝく世のたゝしま
をとく

えひ衣

香字抄云梂梅檀樹葉皮春節為香故
云葉皮 又裛被香俗云衣比親王家方よ
裛被香ありこれしとえひの香といふ一云
薫衣香の一名一云とへし薫物の名也
いにしへひとの志をふまをねんねかいひをいひなすよ
是ハ童部の詞よ至言を行せんと約束し

て至言をし志さしふの緑つくとひとく何そも
うちおもしてはかいつるをするや志
まとふハ志つまや栖遅とりきて志つまとかいい
よおりやをひとしの心をさそてけ云すりまつ
ひのかたもし緑をなく事を志のしつまとかいひ
ひわからひらかしてなり此物紀のいうを
のしくの世俗の事をもおかしく用ふる也
緑つきそてとちゆん事いふすらいてて今や給くそへのあやふき
志つまふの緑なくといふよりよりての緑つきそて
ともちゆん事しとよありともちの山のいまをともちて

扨いふ也といふは孫つきてわいふ事ハ八海
ふとの論義の時ハ竪義者ハ孫とハいへハ威儀師
磬をうちなるを其後論義をやむるなるかこうの
小も通るなりとそ

いふなともいふまつると云ふあしとやうの心より外
人のみ下紐水のちきりいひて思ふていふまつるゝ

何しにうきあきにも何を
あれにもあるをいはれまもあるめて

朱雀院の行幸ある事
若紫巻と同時横の並也

夕霧也かをきこえきさこ也よりふちさきをかるひの也に
夕きりのなにかもしきハ女房よたちなりて

雲間もらいそんかて
夕されハ事縁りんと有り舟の羽ありへし

一段にて
かうさこ也ともかてかうしをひとしくらいまつり
中ことハ中比の母流ハ上下ひとしきなり
らしくもをせぬといふ也

大鼓をさへからんたりとありまうしたせて
礼記曰鐘鼓在庭琴瑟在堂 延宝四年三月廿

又日覧舞楽左大臣時平公仰令推太鼓
階前自打之云々　と楽太鼓ハ舞す堂
下にて打事也寛治五年正月廿五日
殿上競馬六番の時　主上自打大鼓給ひ
時置堂上也

ぬさとまつりし行へ
あまとぬるとてさかりつゝき所へ行かす
ひさきのゆかりをさかりと給くハ
紫乃卯花の二条院へさかりの事に行
事にて霜月の比也

御衣ハさらく
李部王記　天暦五年六月九日以膳沈香折
敷四枚用秋色らつかの地給ひ候くの
候き　と楽秋色ハ青き茶椀の影と云々

ゆかし色かへたりかくうハ立てみつる
延喜十七年参議三善清行請禁深紅衣
服奏議之但浅紅軽黄未及火色者不
在制限　長保二年太政官符云紅紫
之服提防自存中袴直袍下襲之類或
是用紅或亦用紫雖禁其深染未曾

制其浅色一　今案これ并せしさだめは、その
きぬを禁色となしけるをわざとゆるし色と
ふ制禁に及ぶとこれも着用せらるゝ故つよきによ
人のねがひは禁色にてたやすく著用せ
きゆるされくちわかちゆへに深色を聴色
といふ説はあやまりなり。おほよそ色のうすきは
こゝろは淡の色なる薄色といへり

うちき一つら禄

袿は大小あり。小袿は丈一の今或はおなし
所々のきぬのゆきあはせのよく表着にまかへり

小うちきをさ宇治寸法は次第よ上にはかりはたか
らすくろきとらぬとは紫の色なるところ
多くとりあへし

ふるきのうへ表衣

江次第云、昔蕃客参入時、童明親王乗鴨毛
車着黒貂裘、八重見物、世間蕃客稀以件
裘一領持来為重物、見八重大慙云々

きしき官

政官なとなりて

朝にはあのさかひにけなしみとつらてもとかゝりん

好忠集
ぬる目にやけさいぢらはしつ乃ん新のゆかいのちもれぬる
松の雪乃きわてらきになりつらり
み山には松の雪だに消なくに都は野への若菜つみけり
今案　松の雪は志ろきころをむしつもりけ女
おやまれはわかなけるかとつふや
の若なひしむくの心
百秋の地よりに右馬頭かいひし事と
おもしろきのおと
浦ちかくふりくる雪は白浪の末の松山こすかとぞみる
いさゝかおもふはつく袖くつるしあり

なきかけてとあててわきせぐ門わ来さ
せんぬめく
うすきなうしら雪は衣の袖をかさねておさの袖の所
あさのそてハ朝のうてなり
ワつき物はうらかくまずと
白氏秦中吟に幼者形不蔽老者體無温と
ありとりて幼老とつぶとはしたる心によ
りて老をいとけなきもくさり補無温と
いひんとて火桶に火をつくめをるくし
まろやかなるさまなり

夜こしきこゆきやと語ふなり上下とも此詞あり

しる判

たいこれはましてとりしきる人来事らはよくし

おいも志いなと以ふへし

うら哀れんのつきはあまいつ北ふかこ作乃見え

(えた集)ひろき我宿のつきむら哀れんの作きかきりえ

と棄たりくふくそろかちつのもとあはれ

別(コツ)よ年梅りと人き哀のあらとやそうれは

源氏の君んてをかりしろ君りあのことか

浦君り来つむよりのつみよへつらまあはせ

よりあはれ判

あさましのくちりけさや

東橋乃云ふ人事あ判

いさやう色のえゆるをましく

葉萩(ヨナクハ)抱語云祐子(スケコ)内親(ヒメミコ)王家梅(コウハイ)十二とそま

作りくうと内の御使として中納言(ナゴン)局(ツボネ)まいりあ

アとあるらみてまいりてふくしうたと梅(コウ)色

やとや宿判らか抱語まらいりける

しのこうちきまろ君のみ中し色のうちき

今棄みやり色とに紅梅(コウハイ)乃きさるとゆへ

色ゝこき紅の色もあり又紅梅の色もあれ
ましたの色わく此頃ハく赤き衣あれ
黒き衣とハ三ツ大臣ゆるし衣をかさし
きゝやうえゆるされぬ人ハ紅のこきかく
にゆるされハ禁色なりけるにゆりてえ
梅なるもましきとぞいへり
なほしのころひもしく染やうも
上ハ三ツ黒き衣ハ赤ねといふて[illegible]
も黒き衣のうらをく白色なるをいふ
ありや

おりくの月かけ
[illegible]まけとおぼしきもあれと月かけて[illegible]
されたるやさをしとうきおもひりてつまと
おもへるやまさんとおつむの[illegible]
[illegible]りいて[illegible]時もるの[illegible]いろく
みちのゆるまハおもしといへり
あのひも花もさくそもてすみしてぞ
命婦のまつむのうへ[illegible]しるや
やちのうでたりた
かいなくいひしすへくとい[illegible]又とて

なかなかに末摘花の口つきのせめて命婦(ミヤウフ)に
とかきあまりしのみぞ
見るならさは命のものゆかしん
末摘(ツム)乃をくれなるむとわさましとかはし
てうるまさは命乃もるものかと命婦まて
んをとりして四すみて
かの返しくや
くれないさわとくるけめしくるつ
あはしくんぶらとくけなくく
やのやとくりあとまさつくへるとやちす

くさわと命婦をの給て
んさるあ今は猶ひとり志をいとこ見あん
利
源氏の君ハひたちひとしぬふを末
はむれ事とは志つぬちうちをあやし
く思て
あとやさむきあさ霜しひ祢りこのちの葉乃
文あいやみて侍りん
政事(セイジ)要略(コウリヤク)衛門府(エモンフ)風俗(フウゾク)歌(ウタ)云
多ゝ良女(タヽラメ)乃花(ハナ)の如(ゴト)かい以(カナヨリ)祢利好(コノム)牟(ヤ)和

## 擬紫色好半衣

是はむかしありける一人の女房の詞やわ
らかにやはといふはまつもやさしくいふよしう
いはゞこのむ花は鼻のあさき人なりたる
なりといはゞこのむは好色の風俗なるよ
里そそろに詞を又たらちめの花はいつ松の葉
とはなる事をとききあやまりたるなるべし上
の詞にかへてあり
あながちの御事なり此中すいはおつるとて
みさあり

これ又一人の女房の詞也左京の命婦肥
後の宰相めいそれぞれあつき也けは此二人のさの
ともあるまじきかんしたる人もいふて
あるまじとある中の姿もよかりしてはなさみけれはみよかや
衣紋は中にも見るもとりぬわる事もなくはなやかにも
今案みえし見えねのやうにならぬ人もみよ
のんきりさねくいふは只しおもて
こまかく
の御衣なとにはまつよ人のまつれる
源氏の君の御料にて人のまつれる

京のたよりもまたゆかしのうへとなり給

へるや

移ひ人とさこしなれ

またつむりのかくれなきしより女房などいふもの

より北の御かたもおなしうちにとき批判

志てらるなり

この物かたりにあるはれは

男踏歌は正月十四日の事之初音の巻よ

くはしを志かるへし

件ともわしらりかこうり

はなしきは御とになる婦へき事といふや

またつむ花とみありしかりしかとゆく

ことといふや

さんかの御はうそく末にはいとおもきなりとかん

給は

末摘の巻の御いそかしにおほつかなきは

源氏の君とくり給し衣裳ときなかりき給

色のゆへなり

ゆも物かりしはよろしき紋ときれなり

しらいきてなり哉

此一段の引流(ロウ)とあれハすりハ源氏のとをり給
つきぬともの中よりなかハ末もわりを
ゐと今見へて落ちて一云表着(ウハキ)ハより末に
ひのさすもてらされつゝとめてしくさひ
落也

くれなゐハうすなつかしきもあれハより
むかしのひめ君の事とくれなゐにて紅(コウ)
顔(トシ)をいふて

もくろう
山海経(サンカイキヤウ)云 東海(トウカイ)有(アリ)黒歯国(コクシノクニ)其俗(ソノゾク)婦人(フジン)ハ歯黒(ハクロシ)

黒染(クロゾメ) 今案日本ハ東海の中にある国也
彼俗(ゾク)よりおこりたるにやすめしいにしへとかきなる女
ゆへなり孫とつゝきされハ古代(コタイ)の君の事を
いひなく紫の姫君も十歳よりおはぐろそめ
ぐろそめなりきよし

いく心ちしきかたとてあつてと
是ハ末摘(スヱツム)花の君也
かきなるき女とうきなくもかよるにとつ事く
とあつかひのおもとよりとてきる

平仲(ヘイチウ)

平定文かあらむかや
東北たえかりあさことゝしる
わかさいさて梅の風にしけりをいふ
求菅梅を杜子美か詩につくれり
あしく
仁和芹川の行幸の次に八条院の作 斉
御輿之使初造階隠なと 見李部王記
天慶六年に 今案南階の方にあるを二
あつ上をふきつゝれをもちゐしより鳳輦
を東しきよろしとて おのつから京御

下御あらんなとあらん
あふいとかしらの今の御ゆくたち
そいは抱結の作者の羽ものとも事也

以下
3丁
白紙